

ギリシア暗黒時代の神域

——キプロスとの比較——

安 永 信 二

(1996年1月24日受理)

序

ミケーネ社会崩壊後、ギリシア世界は数百年にわたる暗黒時代を迎えた。文字史料の欠如により現代の研究者たちがほとんど実態を把握することができないためにつけられた名称であるが⁽¹⁾、近年の目覚ましい発掘調査の展開とともに次第にその内容が明らかにされ始めてきた⁽²⁾。祭祀もその一つである。暗黒時代、祭祀活動は一時的に中断していたと考えられている⁽³⁾。ミノア/ミケーネ時代から祭祀が連続していたのはクレタ島のディクテー洞窟ほか一部の神域以外知られていない⁽⁴⁾。また、メッセニア西部のニホリア、クレタ島のスマリ、アルゴリスのアシネなどでは、すでに前10世紀前後から祭祀行為が行われていた可能性が指摘されているものの⁽⁵⁾、首長の住居と目される家屋が祭祀の場として兼用されていたにすぎず、当時の祭祀は空間的に曖昧な状態の中で行われていた⁽⁶⁾。ギリシア世界に独立した神殿が出現したのは前8世紀のことであり、サモスのヘライオンに建てられた長さ約33メートルの細長い神殿（ヘカトンペドン）がその最初とされている。これとほぼ同じ時期にペラホラのヘーラー＝アクライア、エレクトリアのアポロン＝ダフネフォロス⁽⁷⁾、さらに前8世紀末ごろから各地に神殿が建立されるようになるが、神殿の建立と同時に祭祀が始まったわけではなかった。それ以前からすでに祭壇を中心とする屋外での祭祀活動が行われていたのである。パロスのククナリエスでは前8世紀末ごろアテナ神殿が建立されたが、神殿の東隣に位置する平地に設置された祭壇と思われる構造物の周囲からは、多数の獣骨とプロト＝ジオメトリック期の土器片が出土しており、この地において、すでに前8世初めごろからアテナ女神崇拝が始まっていたものと解されている⁽⁸⁾。また、サモスのヘライオンでも初期の神域は屋外の祭壇のみを主体とするものであった。

さて、祭壇を主要構造とする神域の形態は、暗黒時代のギリシアに限られたものではなかった。ミノア/ミケーネ時代のギリシアとキプロスにも同じく建築物不在の神域構造が存在した。ギリシアでは指輪や印章に描かれた神域の様子から、屋外の祭壇が重要な意味を持っていたことを読み取ることができる。また、前2千年紀半ばに作られたキプロス東北部に位置するアヨス＝ヤコボスの神域は、祭壇がその中心的機能を果たしていた。このように、付属する建築物や神殿のない、祭壇のみを中心とする神域（Rural Sanctuary）は鉄器時代以前からすでに東地中海世界に存在しており、サモスのヘライオンをはじめとする暗黒時代ギリシアの初期神域はこれらの伝統を受け継いだ可能性を有している。

そこで本論では、近年の発掘調査から得られた知見をもとに、それぞれの神域構造を比較し、相互の関連性の有無を検討してみたい。

I サモスのヘライオン

サモス島のヘライオン（ヘーラー神域）の調査はすでにルイ14世時代のフランス人医師にして自然科学者であった de Tournefort によって始められた。19世紀末には一時ギリシア考古学協会が発掘を担当したが、今世紀に入ってからドイツ考古学協会が中心となって現在でも発掘調査が進められている⁽⁹⁾。これまでの調査の結果、初めて神殿が建立されたのは前8世紀であること、前6世紀前半に壮大な神殿（ロイコス神殿）が完成したがその直後に取り壊され、新たにより大規模な神殿の造営が始まったこと、しかしこの建築はローマ時代まで未完成のままに終わったことなどがわかっている（図1）。出土品は前7～前6世紀にかけてとくに豊富であった。コリント陶器、ワニやアフリカ=カモシカの頭蓋骨、エジプト製の象牙のライオン像、バビロニアの「犬を連れた人物像」⁽¹⁰⁾、オリエント製と思われる馬飾りなどがもたらされ、ギリシア内はもちろん、サモスがオリエント各地と交易関係で結ばれていたことを証明すると同時に、この時期がヘライオンの全盛期であったことを示している。また、アルカイック期に巨大な神殿が建立され、各地から奉納品がもたらされたにもかかわらず、デルフィやオリンピアなどのように全ギリシア的な信仰の中心とはならず、最後までローカルな神域であった⁽¹¹⁾。それでもこの地に最初に建てられたヘカトンペドンがアルカイック期のギリシア諸神殿の原型となっており⁽¹²⁾、暗黒時代末期、サモス島が文化の発信地の一つであったことは疑いない。

前述したようにヘライオンでは神殿に先行して祭壇を中心とする祭祀が行われていた。

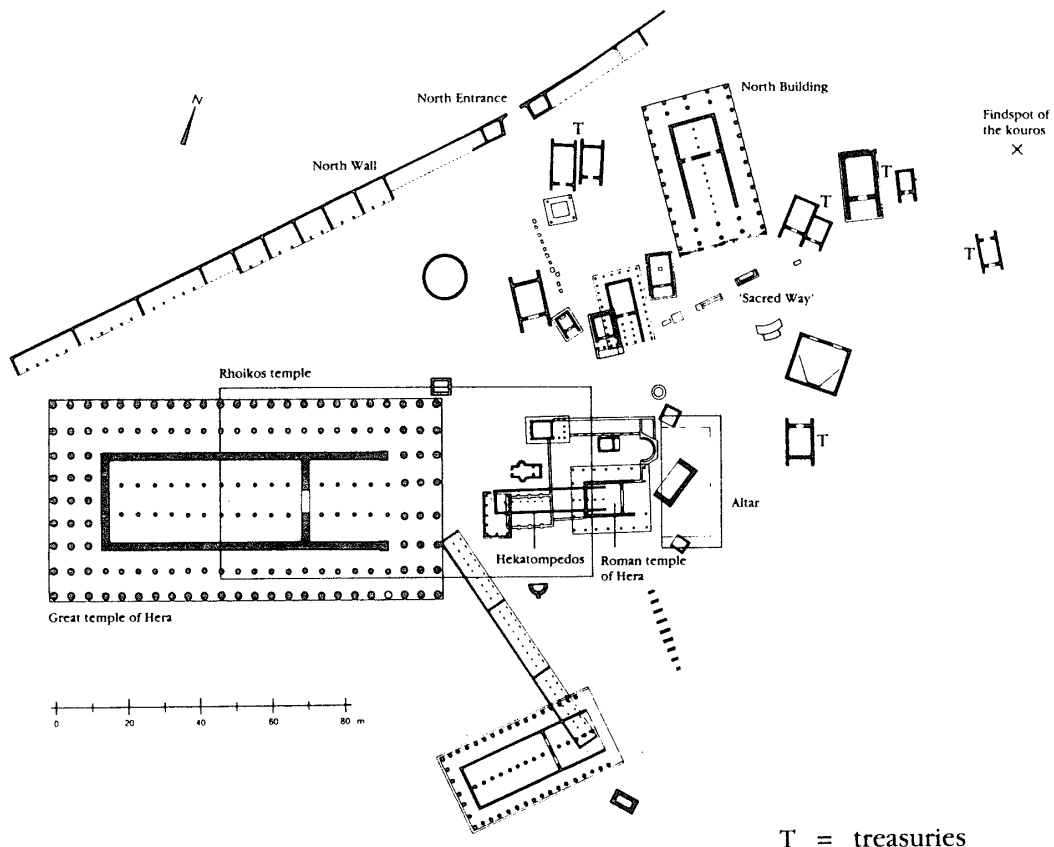


図1 サモスのヘライオン

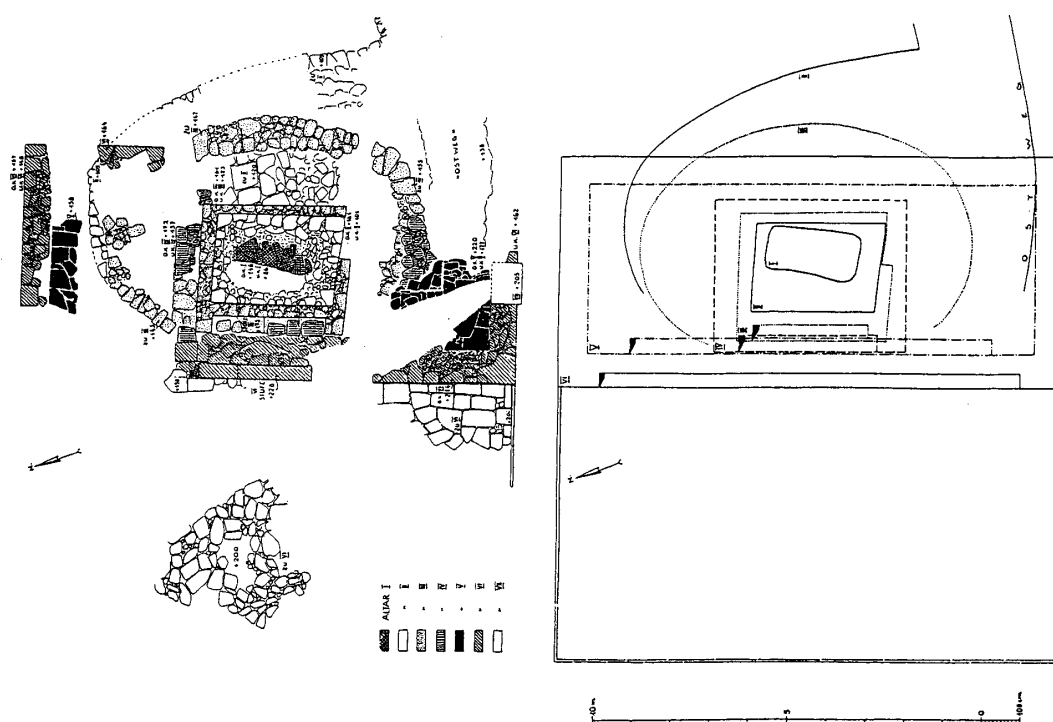


図2 ヘライオンの祭壇 (I~VI)

祭壇が最初に作られた年代については論議されているところであるが⁽¹³⁾、前9世紀ごろまで遡り、ヘカトンペドン建立までに2度作り直されていることが確認されている⁽¹⁴⁾。これらはギリシア最古の建造祭壇で、石で柱が組まれていた。最初に作られた祭壇 (Altar I) は 2.7m×1.3m、二番目に作られた祭壇 (Altar II) は 3.3m×2.3m と、後の時代のモニュメンタルな祭壇に比べるとやや小ぶりである (図2)。祭壇内部およびその周囲から、獣骨と灰を含む地層が発見されており⁽¹⁵⁾、この祭壇が、犠牲獣を焼くために使用されていたのは明らかである。また、1989年の発掘で発見された前7~前6世紀の井戸からは夥しい種類と量の奉納品が出土した。この中に、犠牲として供された動物の骨も多数発見されたが、牛科 (とくに雌牛) の骨が最も多く、また他の獣骨も含めて大腿骨がまったく出ていないことから、犠牲獣は主に雌牛が捧げられ、腿肉が神 (もしくは神官) のために取り分けられた後、残りの部位を参拝者が食してこの井戸に捨てたものと推測されている⁽¹⁶⁾。おそらく「祭壇の近くで犠牲獣を清めて飾り付け、斧で屠った後肉を切り分け薪に乗せて神への酒を注ぐ」儀式を行い、「集まった者たちは肉を串に刺して焼き、肉を食べ酒を飲む」という、ホメロスが表現したのとほぼ同じ宴が繰りひろげられたのであろう⁽¹⁷⁾。

さて、サモスのヘライオンにはリュゴス (柳) の木と係わる伝説が存在する。パウサニアスは、ヘラーはサモスのインブラソス川の畔にあるリュゴスの木の下で誕生したというサモス人の言伝えを紹介するとともに (7-4-4)、彼の時代にもなおリュゴスの木はヘライオンに植わっていたこと、またギリシア各地にある聖木のうち、サモスのリュゴスが最古であることを報告している (8-23-5)。そして1963年の発掘中、祭壇のすぐ横から木の切り株が発見され、パウサニアスの言うリュゴスではないかということで話題を呼んだ。しかしこの切り株の詳細な分析が1985年に行われた結果、(1)この木はリュゴスではなくネズであること、(2)カーボン14の検査ではこの木の生育していた年代が前750~前450年を示して

いること、(3)この木の寿命はおよそ80年であることが判明した。従って、発見された木は祭祀が始まったころにも、またパウサニアスの時代にも存在してなかったことは明らかである⁽¹⁸⁾。それでもアルカイック期から古典期にかけての一時期、祭壇の側に木が植わっていたことは事実であり、リュゴスではなかったにせよ、この木が聖木として崇められていたことはほぼ間違いないと思われる。

ヘライオン以外でも、多くの神域が木や森、そして水(泉か川)と密接な関係を持っている。ヘロドトスはアテナイのアクロポリスにあるアテナ女神が与えたというオリーブについて、ペルシア戦争中に起こった不思議なできごとをつぎのように語る。「このオリーブの樹がペルシア人の放った火のために、神殿の他の部分とともに焼失してしまった。ところが火災の翌日、ペルシア王に生け贄をささげることを命じられたアテナイ人たちが、神殿のところまで登っていくと、1ペキュスほどの芽が幹から生じているのを見たのである」(8-55 松平千秋訳)。またアルカディアのカピュエウス人は、トロヤ遠征前にメネラオスが植えたプラタナスの木を、メネライスと呼んでいたことをパウサニアスは報告している(8-23-4)。これらの逸話が事実であったかどうかは別にして、古代ギリシア人が一部の木を神や英雄に結びつく神聖なものとして見ていたことは確かであった。そしてこのような考えは、すでにホメロスの時代からあった。オデュッセウスはデロス島のアポロン神域の祭壇わきに植わっていたナツメヤシの若木の見事さに心打たれた(6-165)⁽¹⁹⁾。また、トロヤ・ギリシア両軍の様子を遠くから見るためにゼウスが赴いたイダ山の神域には祭壇近くに森と泉が(*Il.* 8-48)、さらにアレースとの浮気を暴露されたアフロディーテはキプロスのパポスへ逃げ帰ったが、そこにも祭壇と森、それに沐浴ができる泉があった⁽²⁰⁾。このように多くの神域には木(森)が付随しており、人々はこれらを神聖な存在として崇めていたが、聖木として最も有名なのがドドナの櫟の木である。ギリシア最古の神託として名高いドドナでは、エジプトのテバイから飛んできた鳩がここにあった櫟の木にとまり、ゼウスの神託所を開くよう命じたという(*Hdt.* 2-55)。ドドナ人はそれに従って聖域を設け、デルフィに次ぐ有名な神託所となったが、ここでの占いは聖木であった櫟の木の騒めきをすなわちゼウスの託宣として判読するものであった⁽²¹⁾。一方、オリンピアのゼウス神域は森自体が神域であった。ここは別名アルティス(「森」の意)とも呼ばれ⁽²²⁾、非常に古くから奉納品が献じられていた⁽²³⁾。しかしかなり長い間神殿は作られず、祭壇を中心とする祭祀が行われていたのである。

これらの神域にはテメノス(原意は「切り取り地」という語が使用されており、ホメロス時代、人間の住む所とは区別された土地が、すでに多くの場所で神に捧げられていたことを示している。また、これらの地ではサモスのヘライオンと同じく、神殿が建立される前から神域(テメノス)として確立していた。そして、その多くが聖なる森の中にある祭壇、もしくは祭壇とその側の聖木という自然状態に近い形態であった。

上述のような暗黒時代に見られる一部の神域の形態、すなわちテメノス・祭壇・聖木という組合せは、ギリシアのみに限られていたわけではない。キプロスにも同種の神域を見出すことができる。

II キプロスの Rural Sanctuary

アルカイック期⁽²⁴⁾におけるキプロスの神域の形態は大きくつぎの4つに分類されている。

- (1) ペリボロス（囲い壁）に囲まれた祭壇のある神域
- (2) 神域（テメノス）と、神域から離れたところにある礼拝所
- (3) 神域と礼拝所
- (4) 複数の神苑と神殿もしくは礼拝所

サモスやオリンピアの神域が(1)の形態に属することは明らかである。しかし、この分類自体が主に神域内に屋根のついた建築物があるか否かによってなされ、またわずかな参考例（しかも発掘調査が進んでない遺跡も多い）しかないため、きわめて大まかなものにならず⁽²⁵⁾、個々の例を具体的に検討することが必要である。

さて、暗黒時代ギリシアの神域と比較する上で大きな類似性が見られるのはクリオンであろう⁽²⁶⁾。クリオンはキプロス南岸、リマソルからおおよそ 15km ほど西へ行ったところに位置するアルカイック期からローマ時代まで続いたアポロン神域の遺跡である（図3）。

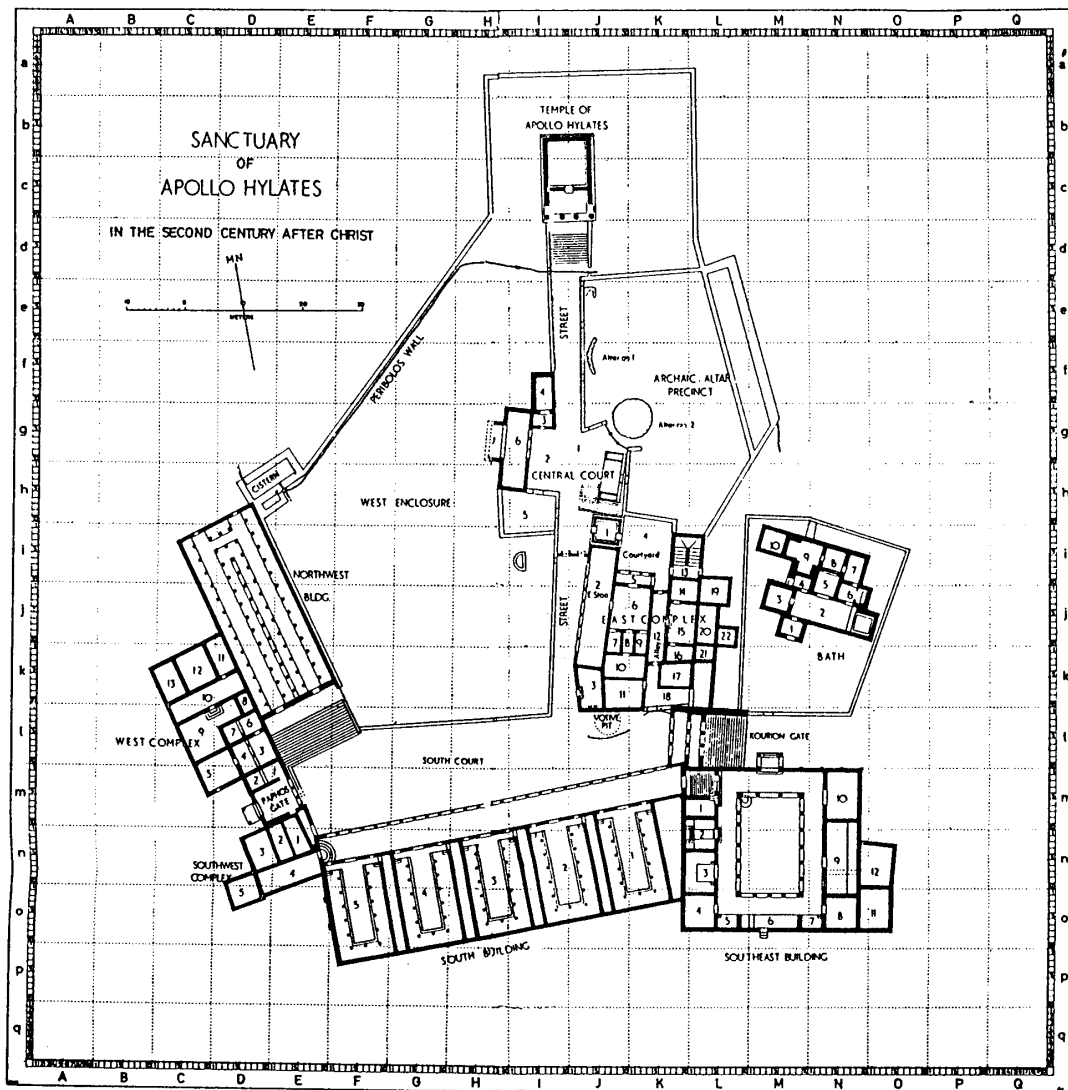


図3 クリオンの神域（ローマ時代）

ここでは19世紀後半に調査が開始され、1935年から McFadden らによって本格的な発掘が進められたが、正式な発掘報告書が出される前に彼がボートの水難事故で死亡したため、限られた情報しか得られなかった。その後アメリカの Scranton が McFadden の発掘日誌をもとに調査を行い、1978年以降新たに発掘が展開されてからは次第にその詳細が明らかにされつつある⁽²⁷⁾。

McFadden の発掘により、ローマ時代のクリオンは南北約 140m、東西約 130m の広さで、最北端の神殿のほかに浴場と少なくとも6つのグループの建て物、さらに2つの門を持つ神域であったこと、しかしここが神域として成立したアルカイック期には、この神域はローマ時代の神域の東北部分に位置する南北約 40m、東西約 35m ほどの小さなものにすぎなかったことなどが知られている。この区域(図4)は前8世紀後半から前5世紀までの土器片とともに多数の小像が出土している一方で、建造物の痕跡はほとんど見られない。しかし神域のほぼ中央部分に、東側半分が欠落した直径 6m 強の無造作に組まれた半円形の石の構造物が発見され(図4A)、石の隙間の土が大量の仔山羊の骨や小像を含む灰から成っていることから、Scranton はこれが祭壇であると断定した⁽²⁸⁾。その後行われた獣骨の分析結果は、仔羊をわずかに含んでいるものの仔山羊が大半を占めていること、また牡が多く、右後脚部の骨も多いことを示している⁽²⁹⁾。1980年の発掘では、祭壇からテラ

コッタ小像、獣骨、土器片、金属片に混じって黄金と銀でできた牛の奉納品が1体ずつ発見された。この牛像は、ギリシアあるいはオリエントの製法とは異なっているため、輸入されたものではなく、キプロスで製作された可能性が高い⁽³⁰⁾。

1981年の調査は、この円形祭壇の北西方向およそ 10m に位置する McFadden が“Archaic altar pit”と称した弧形の石組みの周囲を中心に進められた(図4B)。この弧形構造の東側には砂利石が水平に並べられており、おそらく祭壇の石を積むための基礎だったものと目されている。この周囲からは円形祭壇と同じく土器片、テラコッタ小像、獣骨が出土するとともに、2つのスカラベも発見された。1つは銀の台に水晶が

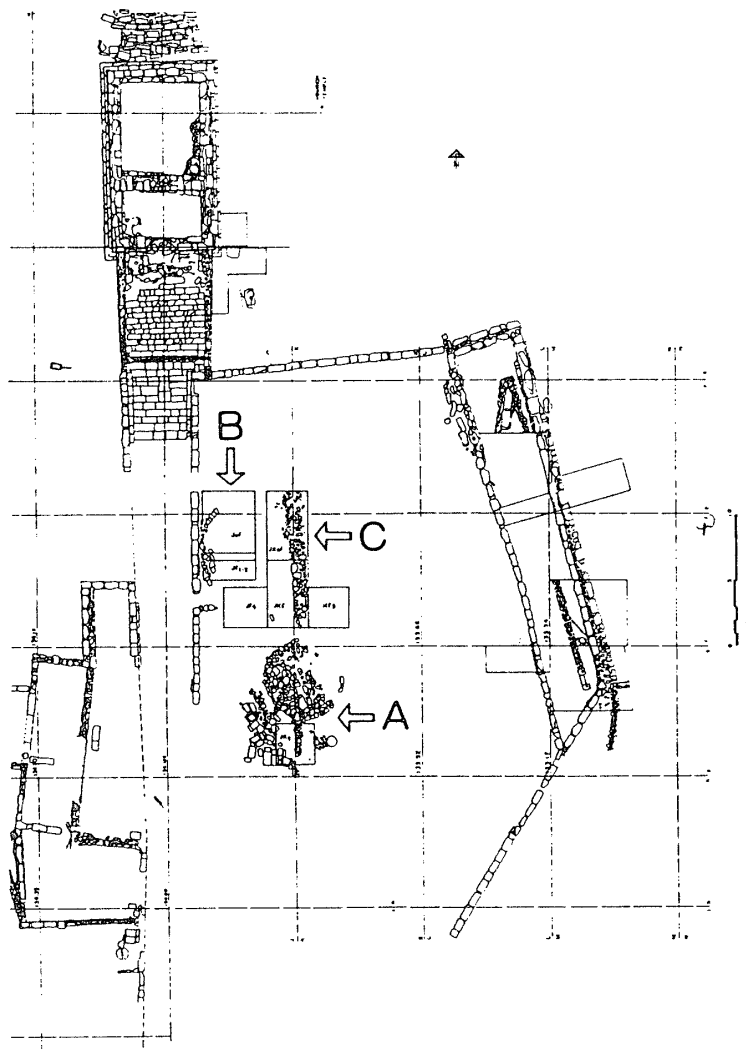


図4 クリオンの初期神域

はめ込まれたもので、裏側には木もしくは花を真中にした2人の人間が刻まれている。もう1つはファイヤンスでできており、裏側にはヒエログリフが彫られていた。この2つはフェニキア=タイプを模した前7～前6世紀のキプロス製品であると発掘者 Buitron は判断している⁽³¹⁾。これらの出土品により、弧形の構造物も祭壇であり、前7世紀（あるいは前6世紀初め）に作られたことが明らかとなった。さらに同じ年、円形祭壇から北に走る直線の石壁の調査も行われ（図4C）、この東側からやはり前7～前6世紀のテラコッタ小像、獣骨、土器片、牛を含むブロンズ製動物像などが出土した。

以上の調査結果から、クリオンの初期神域の形態を次のように想像することができる。

- (1) 少なくとも前7世紀には神域となっていた。
- (2) 神殿等の家屋が存在しない屋外の神域であった⁽³²⁾。
- (3) 2つの祭壇が設けられ、ここで神への奉納品と犠牲獣が捧げられた。
- (4) 南北に走る石壁が神域を二分していた。

このようにクリオンの初期神域の形態は、(4)の石壁を除いてギリシア暗黒時代の初期神域ときわめて近い関係にあることがわかった。しかし、類似している点はこれにとどまらない。神域の西側で近年発見された円形建造物には木が植えられ、ここがアポロン神域の象徴的存在の一つであったことが指摘されているのである⁽³³⁾。この指摘はクリオンで崇められていたアポロン神にヒュラテス（「森林」の意）という別称が与えられており、ここが森林と大きな関係を持つ神域であったという事実から、十分に首肯できるものと思われる。円形建造物は、この地域の最も神聖な場所であった森から移植された「聖木」の保護壁となっていたのではなかろうか。円形建造物が聖木の植えられた場所であったとすれば、アポロン神域の初期形態はサモスのヘライオンのそれとほとんど同じものであったと断定することができよう。年代的にも両者は近接する時代に属しているのだが、実は屋外の祭壇を中心とする神域ははでに青銅器時代から存在していた。

前二千年紀半ば、キプロス東北部ファマグスタ地方のアヨス=ヤコボスにある小高い丘に直径約10mの小さな神域が作られた。木の柵で囲まれた内側の表土は漆喰で塗られ、祭壇と覚しき50cmほどの高さの石積みの壇が2つ、テラコッタ製の棺もしくは浴槽、それに神域を東西に二分する石壁等のみが設置された簡素なものであった（図5）。現在のところ、これ以前には同じタイプの神域が発見されていないことから、アヨス=ヤコボスはキ

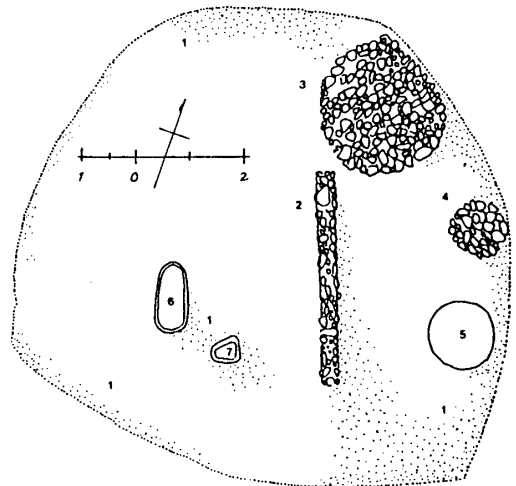


図5 アヨス=ヤコボス

プロスの Rural Sanctuary の原型とされている⁽³⁴⁾。しかし発掘の調査結果は、この形態がキプロス内の他地域に広まったことを示していない。「海の民」による混乱がおさまった後期青銅器時代第三期（LCⅢ）でさえ、各地に集落が形成され神域も作られたにもかかわらず、世俗の建築物の中に設けられたり、神域内部に家屋や神殿が建てられるなど、アヨス=ヤコボスの簡素さを踏襲するものはなかった。ところが前9世紀ごろ、アヤ=イリニ（キプロス北西部）に Rural Sanctuary が出現した。ここでは青銅器時代の神域——青銅器時代末期に神殿、神官住居、倉庫が建てられていた——の廃墟が埋められ、その上にア

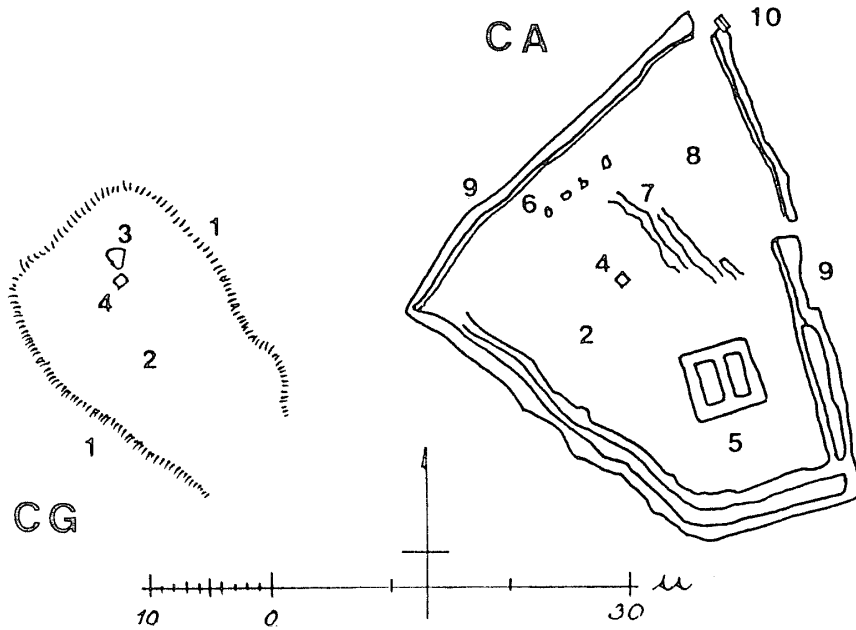


図6 アヤ＝イリニの初期神域
(CG＝ジオメトリック期, CA＝アルカイック期)

ヨス＝ヤコボスと同じ構造を持つ神域が作られた。当初は神域を囲む土壁と祭壇のみであったが、アルカイック期になると、おそらく2本の聖木を保護するためと思われる石造りの仕切り壁が新たに構築されている(図6)⁽³⁵⁾。すなわち、アヤ＝イリニではそれまで存在した神域が捨てられ、建築物を

持たない自然状態に近い姿が選択された。そして、この形態がアルカイック期のキプロスに広まり、クリオンでも採用されたのである⁽³⁶⁾。

このためキプロスの Rural Sanctuary は、青銅器時代にはアヨス＝ヤコボス以外にはなく、鉄器時代に入ってからなぜか突然にアヤ＝イリニおよびクリオンで復活したという印象を受けざるを得ないが、これはキプロスの神域に関して古代史料に乏しく⁽³⁷⁾、また発掘による調査も決して満足のいく状態ではない⁽³⁸⁾ ことにもよるのかも知れない。それゆえ、キプロス内に時代的・地域的に「点」としてのみ存在する Rural Sanctuary を「線」として捉えるには、さらなる発掘成果を待つ必要があるだろう。しかし、たとえ「点」としての存在でしかなかったにせよ、「線」でつなぐ要素がないわけではない。その要素とは、キプロスとミノア/ミケーネ時代のギリシアとの関係である。

Ⅲ ミノア/ミケーネ時代の Rural Sanctuary

ミノア/ミケーネ時代の祭祀についても、不明な点が多い。しかし近年では、両時代の祭祀を同一のものとみなすという以前の考え⁽³⁹⁾ は否定され、両者は外見的に類似するところを持ちながら、根本的には異なる祭祀を有していたこと⁽⁴⁰⁾、またクレタでは国家宗教として統一された可能性はあるがギリシア本土は地域によって異なっていたらうこと⁽⁴¹⁾、さらに両文明とも一貫して同じ祭祀が続いていたわけではないこと⁽⁴²⁾ などを基本的スタンスとして研究が進められている。

さて、ミノア時代のクレタの神域にはつぎのような形態があった。

(1) Peak Sanctuary: 人里離れた山の頂上付近に設けられた屋外祭祀場で、主に東部を中心に現在20か所以上が見つかっている。奉納品には陶製の家畜や果物、神の癒しを祈願する身体部位(‘Votive limbs’)などが多いが、すべての神域が共通する風習を持っていたわけではない。なお、これらの多くは前1500年以降衰退している⁽⁴³⁾。

(2) Cave Sanctuary: 現在発見されている洞窟祭祀場は島の中央部に集中している。

奉納品は Peak Sanctuary と大きく異なり、陶製の像は少なく土器や穀物、動物などが捧げられていた⁽⁴⁴⁾。

(3) House Sanctuary：宮殿もしくは集落内の神域。クノッソス宮殿では、Central Palace Sanctuary, Throne Room complex, East Hall, Hall of the Double Axes, その他いくつかの部屋で祭祀が行われていた。マリアやフェストスの宮殿、あるいはグルニアなどの集落内でも祭祀が行われた神域の存在が知られている⁽⁴⁵⁾。

一方、ギリシア本土の祭祀は、中期ヘラディック期 (MH) までの痕跡がほとんどないため、後期ヘラディック第 I 期 (LH I) にクレタの祭祀習慣を取り入れて成立したものと考えられている⁽⁴⁶⁾。両者に外面的な共通性が見られるのはこのためである。しかし、本土では上記の分類の(1)と(2)はわずかな例を除いて⁽⁴⁷⁾ 発見されていない。また宮殿内部の神域についても、ミケーネやティリンス、ピュロスなどでその存在が確認されているが、祭祀の内容、神域内の壇や炉などの設置物の用途をめぐるは、さまざまに異なる見解が出されている⁽⁴⁸⁾。

このうちキプロスの Rural Sanctuary と対比されるのは、(1)の Peak Sanctuary である。この形態に属する神域は、山頂に限らず眺望の良い場所が選ばれ、自然の岩を利用した屋外のテラスで儀式が行われていた⁽⁴⁹⁾。しかし、屋外という点では同じであるものの、祭壇らしき物が確認できるのはわずかであり、例えばユクタス山の Peak Sanctuary のように、テラスおよび祭壇とほぼ同じ時期に 5 つの部屋を持つ家屋が作られたものもあった。また、クレタ南東部に位置するカト＝シミは、アルカイック期に作られた祭壇がクリオンの円形祭壇と酷似していることが指摘されている⁽⁵⁰⁾。ここは山頂ではないが標高 1,130m の高台に第一宮殿時代末期 (MM II) ごろ作られた、ミノア時代からローマ時代まで祭祀の連続が確認できる貴重な神域である。ここでは MM III 期に家屋が建てられ、その一部にはベンチも備えられたが地滑りで壊れ、LM I 期に 12.5m×7m の壇 (podium) を中心に置く神域が再建された⁽⁵¹⁾。この壇上で儀式が行われた模様であるが、その規模から推してこれが祭壇であるとは言いがたい。

このように考古学的には証明されていない一方で、Rural Sanctuary を示唆する印章や指輪は多数出土している。図 7 で 2 人の女性が礼拝しているのは丘の上にある祭壇で、



図 7



図 8

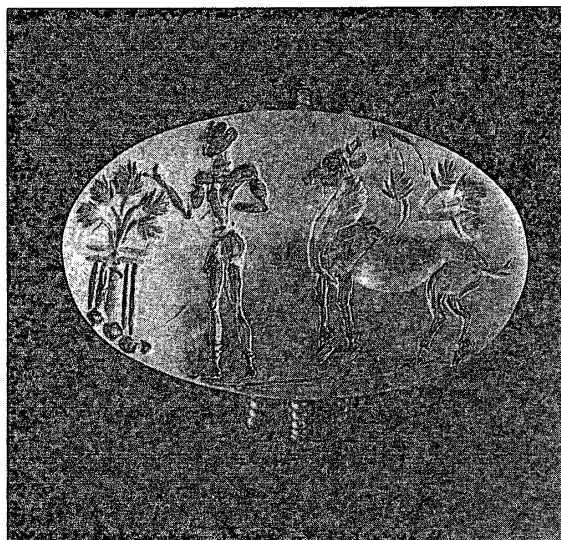


図9



図10



図11

下方中央の入り口から点で表されている道を登って行くものであろう。祭壇の上には木の枝が垂れ下り、両端にも木が植わっていることから、屋外の神域であったことは明らかである⁽⁵²⁾。図8は木の根元にケシの花を持って座っている女神と、彼女に奉納品（花）を捧げている2人の女性の様子である。上に太陽と三日月が描かれており、この神域も屋外に設けられていた。右側に並んでいるのは牛の頭で、おそらく犠牲として捧げられたものであろう⁽⁵³⁾。これらはミケーネで出土したものだが、図8にはミノア芸術の特徴であるダブル＝アックス（両刃の斧）および8の字型の模様、さらにミノア風の衣装が描かれており、クレタの職人がミノアの祭祀の様子を懐古しながら、あるいはミケーネの祭祀風景をミノア風に彫ったものと想像される。一方、ヘライオンやクリオンの神域を彷彿とさせるのが図9である⁽⁵⁴⁾。動物を従えてきた参拝者が向かっているのは、祭壇とその側に植えられた聖木であろう。この動物はおそらく犠牲獣であり、その背後に見える木は、ここが森に囲まれた神域であることをうかがわせる。また足元の線は、神域のペリボロスを表現している

のではないだろうか。図10はやや解釈しがたい⁽⁵⁵⁾。垂直に立っているのは図11中央に立っているのと同じく、石柱かも知れない。しかし、いずれにせよこの上に植わっている木は明らかに柵で囲まれた聖木である。ここも右下に描かれた三日月から、屋外の神域であったことがわかる。この他、屋外にある木や石柱を崇拝の対象としている指輪等が多数しており、ミノア/ミケーネ時代の祭祀の一形態が自然状態であることは確実であった。

指輪等に表されたこれらの神域の図は考古学的な裏付けが取れていないため、ヘライオンやクリオンのそれと同一のものと断定することは難しい。しかし、壺、壁、リュトン、指輪、印章その他のものに表現された内容が、当時の祭祀習慣を描いたものであるとするならば⁽⁵⁶⁾、確かに屋外の祭壇や聖木はミノア/ミケーネ時代にも存在していたのである⁽⁵⁷⁾。

結 語

これまで見てきたように、屋外の祭壇・聖木を中心とする神域は、青銅器時代のキプロスとギリシア、暗黒時代末期からアルカイック期初めにかけてのキプロスとサモス（さらにクレタのカト＝シミ）に共通しているものであることがわかった。無論、偶然の結果ではなく、キプロスとギリシアとの交流の結果にほかならない。銅の産出地であるキプロスは⁽⁵⁸⁾、古くから近隣諸国の進出するところとなったが、ギリシア世界では前16世紀前後からテラやケアでキプロス銅が使用されていた⁽⁵⁹⁾。一方、前14世紀以降はギリシア人がキプロスに進出したことも知られている。しかし、ギリシア人が求めたのは、キプロスの銅だけではなかった。フェニキア人の手によってキプロスに入ってくるオリエン特文化も大きな魅力となっていたのである。ことに暗黒時代末期以降、この傾向は顕著となっていく。前10世紀末ごろから東方との交流を再開したエウボイアのレフカンディは、この時期にあって特異な繁栄を現出したが⁽⁶⁰⁾、レフカンディに東方の物品をもたらしたのはキプロスを経由してやって来たフェニキア人であった⁽⁶¹⁾。彼らはエウボイアのみならず、クレタ⁽⁶²⁾にも来航したことが近年の調査によって判明し、さらにサモスでも早くからキプロスとの接触があった可能性が指摘されている⁽⁶³⁾。

キプロスとギリシアの神域の形態に類似性が認められるのは、こうした両者の関係によるものであることは確かである。しかしその具体的な経緯、すなわち Rural Sanctuaryの原型はどこに求められるのか、またいかにしてもたらされたのか、さらに形態だけでなく祭祀や信仰という精神文化まで伝播したのか等々の疑問が新たに生じるのは言うまでもない。そしてこれらの疑問を解決することがギリシア初期神域の理解に不可欠ではあるが、現在までの発掘結果から答えを引き出すことはきわめて困難である。それゆえ文字史料が豊富となるアルカイック期からのアプローチが要求されるが、今後の課題として検討していきたい。

註

Abbreviations

ACTS *Acts of the International Archaeological Symposium "Cyprus between the Orient and the Occident"* Ed. by Karageorghis, V.

Nicosia 1986

Greek Sanctuaries *Greek Sanctuaries: New approaches* Ed. by Marinatos and Hägg, R.

London 1993

EGCP Early Greek Cult Practice —Proceedings of the Fifth International Symposium at the Swedish Institute at Athens, 26–29 June 1986—

Stockholm 1988

- (1) Snodgrass, A. M. *The Dark Age of Greece* Edinburgh 1971 1ff., 22 n. 2.
- (2) 周藤芳幸「ギリシア暗黒時代の考古学」『歴史評論』543号 1995 14–25. 周藤氏は、アッティカ土器を規準とする従来の編年方法を批判した James の意見を好意的に取り上げている。筆者も暗黒時代の絶対年代には一部疑問を感じるどころがあり氏の今後の研究に期待するものであるが、現時点では新たな年代が確定されていないため、本稿では旧来の編年に従って進めるものとする。
- (3) Snodgrass (*supra* n. 1) 394ff.
- (4) Coldstream, J. N. *Geometric Greece* London 1977 329.
- (5) Sourvinou-Inwood, Ch. “Early Sanctuaries, the eighth century and ritual space” *Greek Sanctuaries* 1–17. Mazarakis Ainian, A. J. “Early Greek Temples: Their Origin and Function” *EGCP* 105–119. 両論文は、すでに暗黒時代初期から祭祀が存在したことを論じている。後者は、祭祀の場となっていた首長住居が後に神殿に変化したことを指摘するが、それが事実であったにしてもこのようなケースは神域全体から見るときわめて稀であり、この形態をギリシア諸神殿の一般的な初期形態とすることはできない。なおニホリアの詳細については、McDonald, W. A. et al. “Excavations at Nichoria in Messenia 1972–1973” *Hesp.* 44 1975 69–141.
- (6) de Polignac, F. *La naissance de la cité grecque* Paris 1984 2nd ed. 1995 32. ; Morris, I. *Burial and ancient society: The Rise of the Greek City-state* Cambridge 1987 189ff.
- (7) Salmon, J. “The Heraeum at Perachora and the Early History of Corinth and Megara” *BSA* 67 1972 161ff. ; Coldstream (*supra* n. 4) 321.
- (8) Schilardi, D. U. “The temple of Athena at Koukounaries” *EGCP* 41–48. ; *To Ergon tis Archeologikis Eterias kata to 1984* Athens 1985 69–72.
- (9) Kyrieleis, H. *Führer durch das Heraion von Samos* Athens 1981 55ff.
- (10) Kyrieleis, H. “Babylonische Bronzen im Heraion von Samos” *JdI* 94 1979 32–48.
- (11) Kyrieleis, H. “The Heraion at Samos” *Greek Sanctuaries* 129.
- (12) Coldstream (*supra* n. 4) 327.
- (13) 祭壇の発掘者は Altar I は前10世紀まで遡るとしているが、多くの学者が異議を唱えている。Buschor, E. and Schleif, H. “Heraion von Samos: Der Altarplatz der Früzeit” *AM* 58 1933 150. Cf. Snodgrass (*supra* n. 1) 277, 410ff. ; Coldstream (*supra* n. 4) 317.
- (14) Buschor and Schleif (*supra* n. 13) 152.
- (15) Bergquist, B. “The Archaeology of Sacrifice: Minoan–Micenaean versus Greek” *EGCP* 25 & n. 8.
- (16) Kyrieleis (*supra* n. 11) 136f.
- (17) *Od.* 3 430–473. サモスの祭宴とリュゴスの木との関係については、Kron, U. “Kultmahle im Heraion von Samos archaischer Zeit” *EGCP* 135–148.
- (18) Kienast, H. J. “Zum heiligen Baum der Hera auf Samos” *AM* 106 1991 71–80. esp. 77ff.
- (19) *Od.* 6–165. 神話ではレートーがアルテミスとアポロンを生んだのは、ナツメヤシ (phoenix) の木の下とされている (*Hym. Apol.* 19, 117)。しかし、パウサニアスがデロスの聖木として挙げているのは、オリーブである (Paus. 8–23–5)。

- (20) 神域にとって水は重要な意味を持っていた。デルフィのアポロン神殿の場合（カスターリアの泉）は巫女の予言能力を高めるため、またアスクレピオスの神域では治療と大きな関わりがあった。See Cole, S.G. "The Use of Water in Greek Sanctuaries" *EGCP* 161-165.
- (21) *Od.* 14-327=19-296; *Hdt.* 2-56; *Paus.* 1-17-5, 8-23-5; *Strb.* 7-7-11 *etc.*
- (22) *Paus.* 5-10-1. また、神域自体が 'to alsos' (「森」) と呼ばれることもあった (*Strb.* 8-6-19).
- (23) Coldstream (*supra* n. 4) 331.
- (24) キプロスのアルカイック期は I と II に分けられ、I は前750～前600年、II は前600～前475年とされている。その他の年代区分については、Karageorghis, V. *The Coroplastic Art of Ancient Cyprus* Nicosia I = 1991, II III = 1993 の Chronological Table を参照。
- (25) Reyes, A. T. *Archaic Cyprus: A Study of the Textual and Archaeological Evidence* Oxford 1994 30. この4つの分類は Gjerstad, E. *The Swedish Cyprus Expedition* 4-2 Stockholm 1948 17ff. によってなされたが、筆者未見のため Reyes の紹介と批判を引用している。
- (26) Scranton はしかし、クリオンの初期神域と Gjerstad の分類(1)には、大型の祭壇の有無という重大な相違があるとして、クリオンを(1)の中には含めていない。Scranton, R. *The Architecture of the Sanctuary of Apollo Hylates at Kourion* *TAPS* 57-5 1967 64f.
- (27) Soren, D. "The Apollo Sanctuary at Kourion: Introductory Summary of the Excavations and its Significance" *ACTS* 393-401.
- (28) Scranton (*supra* n. 26) 6f.
- (29) Buitron, D. "The Circle Rubble Altar in the Archaic Precinct at Kourion" *RDAC* 1981 159.
- (30) Buitron (*supra* n. 29) 158;
- (31) Buitron, D. "The Archaic Precinct at Kourion: 1981 Excavations" *RDAC* 1982 144ff.
- (32) クリオンに最初の神殿が建てられたのは、Scranton (*supra* n. 26 65) がアウグストゥス時代としているのに対し、Soren は前6世紀だとしている (Soren *supra* n. 27 398)。
- (33) Soren (*supra* n. 27) 397.
- (34) Wright, G. R. H. "The Cypriot Rural Sanctuary: An Illuminating Document in Comparative Religion" *Studies in Honour of Vassos Karageorghis* Nicosia 1992 269.
- (35) Wright (*supra* n. 34) 270f.
- (36) Wright (*supra* n. 34) 271. Cf. Scranton (*supra* n. 26) 64f. Scranton はアヤ＝イリニの神域とクリオンの神域を同種のものとはみなしていないが、アヨス＝ヤコボスの神域を二分する石壁がクリオンのそれと同じであることから、年代が離れていることに戸惑いながらも両者の共通性を認めている ('our closest parallel is to a sanctuary which is not contemporary, but much older').
- (37) Reyes (*supra* n. 25) 28.
- (38) Wright (*supra* n. 34) 269.
- (39) Nilsson, M. P. *The Minoan-Mycenaean Religion and its Survival in Greek Religion* 2nd ed. Lund 1950 5-6. 今世紀前半は両文明は同一民族の手によるものとする Evans の説が支配的であったが、Ventriss の線文字B解読成功後、この説は否定され、祭祀・宗教・神話も両者は異なるものとして考えられるようになった。Nilsson 自身根本的にはではないが一部自説を修正している。Nilsson, M. P. *A History of Greek Religion* (Tr. from the Swedish by Fielden, F. J.) 2nd ed. London 1952 'Preface'.
- (40) Vermeule, E. *Greece in the Bronze Age* Chicago 1964 1972² 282ff. ; Taylour, L. W. *The Mycenaeans* 2nd ed. London 1983 45f.
- (41) Dickinson, O. *The Aegean Bronze Age* Cambridge 1994 276-293.
- (42) Walberg, G. "Problems in the Interpretation of some Minoan and Mycenaean Cult Sym-

- bols" *Problems in Greek Prehistory —Papers Presented at the Centenary Conference of the British School of Archaeology at Athens, Manchester April 1986—* Ed. by French, E. B. and Wardle K. A. Bristol 1988 211.
- (43) Dickinson (*supra* n. 41) 275.
- (44) Burkert, W. *Greek Religion* Oxford 1985 (*Eng. tr.*) 24ff.
- (45) Dickinson (*supra* n. 41) 276f.
- (46) Vermeule (*supra* n. 40) 282.; Dickinson (*supra* n. 41) 286.
- (47) エピダウロスのアポロン＝マレアタス神域がこれまで見つかった本土唯一の Peak Sanctuary であるが (Burkert *supra* n. 44 26), クレタの Peak Sanctuary 特有の奉納品 (テラコッタ小像) が欠如しており, 完全にミノアの祭祀を模倣したかどうかについては疑問を持たれている (Dickinson *supra* n. 41 283)。
- (48) 例えば争点の一つに犠牲獣の問題がある。線文字 B の解読により, 神への奉納品はオリーブ油 (FP 13: Ventris, M. and Chadwick, J. *Documents in Mycenaean Greek* Cambridge 1973), 黄金の杯 (Kn02), 小麦・ワイン・チーズ・羊の毛皮・蜂蜜 (Un718) に混じって人間 (Kn02), 牛等や仔羊 (Un 718) なども捧げられていた。またミノア時代クレタのアルハネスでは犠牲として殺害されたと思われる人間の遺体も出土している。犠牲獣が殺されて神に捧げられたことはミケーネ出土のレンズ型の宝飾品から明らかであるが, 焼かれて捧げられたかどうかについては議論されている。See Bergquist (*supra* n. 15).
- (49) Dickinson (*supra* n. 41) 269.
- (50) Buitron-Oliver, D. "Hellenic Trends at the Sanctuary of Apollo Hylates" *ACTS* 383-391. 彼女はクリオンの円形祭壇から北に延びる直線の石壁と, アルカイック期のカト＝シミ神域の祭壇が構造的に同じであること, また両者ともに「森」が関係している神域であること (カト＝シミはローマ期の碑文にヘルメス＝デンドリデス「森の神ヘルメス」と刻まれていた) から, クリオンがクレタと密接な関わりを持っていたことを指摘している。
- (51) Dickinson (*supra* n. 41) 278f.
- (52) Mylonas, G. E. *Mycenae Rich in Gold* Athens 1983 187. また図の中で, 祭壇から階段状に降りてきている 2 本の太い線は水路と考えられている。
- (53) Kontorlis, K. P. *Mycenaean Civilization: Mycenae, Tiryns, Pylos* Athens 1974 30; Mylonas (*supra* n. 52) 187f.
- (54) Nilsson (*supra* n. 39 *Minoan-Mycenaean Religion*) 258f; Mylonas (*supra* n. 52) 192.
- (55) Wright (*supra* n. 34) 280.
- (56) Walberg (*supra* n. 42) 217.
- (57) 木や石柱については, Tree cult あるいは Pillar cult としてエヴァンズに定義づけられたミノア祭祀の特徴とされているが, 木や石柱そのものが崇拝対象となっていたかどうかは疑わしい (Nilsson *supra* n. 39 *Minoan-Mycenaean Religion* 236ff.). またすべての絵図に祭壇が描かれているわけではなく, 屋外の祭壇が一般的な神域形態ではなかった。
- (58) わが国ではキプロス古代史の研究はほとんど行われたことはなかったが, 昨年青銅器時代のキプロス銅についての論文が発表された。木村高子「後期青銅器時代のキプロスにおける銅冶金と交易——ラルナカ湾地方の例から——」『溯航』13 1995. キプロスは青銅器時代から鉄器時代初期にかけて, 東地中海世界の重要な地点となった島であり, さらなる研究が期待される地域になるものと思われる。
- (59) Muhly, J. D. "The Role of Cyprus in the Economy of the Eastern Mediterranean during the Second Millennium B. C." *ACTS* 53.
- (60) Coldstream (*supra* n. 4) 63ff.; Popham, M. R. and Sackett, L. H. ed. *Lefkandi —The Iron*

Age Settlement I 1980 Oxford 358ff.

- (61) 従来フェニキア人の地中海進出は前9世紀とされていたが、前12世紀にまで遡ることが次第に証明されつつある。See Negbi, O. “Early Phoenician Presence in the Mediterranean Islands: A Reappraisal” *AJA* 96 1992 601ff.
- (62) クレタのコモスはミノア時代からキプロスとの関係を持っていたが (Dickinson *supra* n. 41 250), 1980年からの発掘により、前10世紀終わりごろフェニキア人がこの地に神殿を建立していたことが明らかとなった (Shaw, J. W. “Phoenicians in Southern Crete” *AJA* 93 1989 165-183; その他1981年以降の *Hesperia* に掲載された発掘報告書, また Shaw, J. W. ed. *Kommos* Princeton 1995 を参照)。
- (63) Kyrieleis, H. “New Cypriot Finds from the Heraion of Samos” *Cyprus and the East Mediterranean in the Iron Age* Ed. by Tatton-Brown, V. London 1989 52-68.

〔図版典拠〕

- ☒ 1 Kyrieleis, H. “The Heraion at Samos” Fig. 7-2.
- ☒ 2 Buschor und Schleif “Heraion von Samos: Der Altarplatz der Früzeit” Abb. 1 und 2.
- ☒ 3 Scranton, R. “The Architecture of the Sanctuary of Apollo Hylates at Kourion” Plan 1.
- ☒ 4 Buitron, D. “The Archaic Precinct at Kourion: 1981 Excavation” Fig. 1.
- ☒ 5・6・10 Wright, G.R.H. “The Cypriot Rural Sanctuary” Fig. 1, 3, 9-2.
- ☒ 7~9・11 Mylonas, G.E. *Mycenae: Rich in Gold* Fig. 139, 141, 147, 150.